

# 鳥取大学研究成果リポジトリ

## Tottori University research result repository

タイトル Title	三好保徳博士（１９０９－１９９５）の足跡と思い出
著者 Author(s)	鶴崎, 展巨
掲載誌・巻号・ページ Citation	Takakuwaia , 28 : 23 - 28
刊行日 Issue Date	1996-12
資源タイプ Resource Type	学術雑誌論文 / Journal Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	<a href="https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/11546">https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/11546</a>

## 三好保徳先生 (1909-1995)の足跡と思い出

鶴崎 展巨 (鳥取大学教育学部生物学教室)

三好保徳先生 (聖カタリナ女子短大名誉教授) が1995年4月19日, 86才で亡くなられた。私が自分の研究経歴の最初期に出会い, その後の進路決定を含めて大きな影響を受けた先生である。実際には数えるほどしかお会いしていないので, 私淑したという表現が適切かもしれない。三好先生が多足類の研究から事実上離れられてからかなりの年月を経ているので私と同等かそれより若い世代の人には三好先生をあまり知らない方が多いと思われる。先生の御経歴と業績を簡単に紹介するとともに個人的思い出を記して, 三好先生を偲ぶすがとしたい。

年譜は別にまとめたので詳細は省くが, 三好先生は1909年4月17日, 愛媛県北宇和郡好藤村 (現在広見町) のお生まれである。1929年, 愛媛県師範学校 (愛媛大学の前身) を卒業後, 最初は小学校の先生になられたが, 1931年には文部省検定で師範学校中学校高等女学校教員博物内動物教員免許状を取得し, 愛媛県各地の高等女学校, 戦後は高等学校で教職につかれた。愛媛県師範学校での恩師は八木繁一氏であった。この方は牧野富太郎博士の植物採集にもよく同行したという植物学者で, とりわけ海藻類の分類に多くの業績を残された方である (三好, 1972)。三好先生の植物学への深い造詣はこの頃から培われてきたものと想像される。当時の制度では, 高等学校, 高等女学校で教鞭をとるには高等師範学校を卒業する必要があったが, この資格を文部省検定でとること自体なかなか困難なことであつたらしい。三好先生の経歴や業績は一貫してこのような不撓不屈の努力で彩られているが, その一端がすでにここに見える。

さて, この間, 県立八幡浜高等女学校 (現在八幡浜高校) に在職中 (1933-1938) には八幡浜港に揚がる魚類を材料とした分類学的研究に手を染められたが, 1936年にはネズミの咬筋に関する論文も発表されている (三好, 1936)。1938年, 県立松山高等女学校 (現在松山南高校) に転勤となってからは, 松山市南方の皿ヶ嶺を主たる調査地としてザトウムシ類の分類, 形態, 生活史, 越冬習性などに関する研究に着手され, 多数の論文を発表された (別稿参照)。ザトウムシの種名調べには当時, ROEWER (1923) の大著をひもとく必要があったが, これを読むためのドイツ語も全くの独学で修得された。30才のときである。

多足類の分類研究へ転向されたのは, 第二次大戦末期の1943年のことである。その理由は戦況の悪化で国外文献が全く入って来なくなったため, とのちの随筆 (三好, 1949, 1962, 1983) には書かれており, 私も直接に先生からそのように伺ったことがある。多足類の老大家, 高桑良興先生の後継者がまだ現われていなかったことも動機として強く働いたようである。1943年3月23日には高島春雄氏に手紙で多足類研究の相談をし, 6月9日には松山市の親戚宅にいられていた高桑良興先生に初めて会われている (三好, 1949, 1962)。そして1944年3月には女学校を退職し, 4月から東京文理科大学動物学教室にて高桑良興博士に師事することを決意された。戦況はますます厳しく東京からは多くの住人が続々と疎開を始めていた。しかも家族を抱えたまま職を辞しての上京ということで周囲にはずいぶんと反対されたい。しかし, この明日にも死ぬかもしれないという時世で, かつ, 高桑良興博士はすでに70才を過ぎた高齢であり, どうしても今習いに行かなければならないとの心情に駆られ, 決断されたそうである。実際には戦況の悪化で同年9月には松山への退去を余儀なくされたのであるが, 氏に

とって幸いなことに、高桑氏が親戚をたよって所蔵文献とともにやはり松山に疎開されたため、多足類の研究を継続することができた。この間、1945年2月4日には学徒動員による生徒の引率で赴いた愛媛県今治市の工場にて勉強中（このときに書かれていた多足類の研究ノートは私が預かっている資料中に現存する）に一酸化炭素中毒で倒れ、手が炭火に触れたことによる火傷で右手の指を小指を残して無くすという不幸に見舞われたが、それに屈せず研究を続けられた。多足類に関する最初の論文は1947年のニホンフサヤスデの新種記載であると思われるが、最も重要なものは県立松山北高校在職中の1951年から1958年までに動物学雑誌（日本動物学会発行）に「日本産倍足類及び唇足類の分類学的研究」として書き続けられた26編の記載論文（約50種を和文および独文で記載）である。また、生態関係では、短報であるが、1951年のヒラタヤスデにおける雄の抱卵の発見は重要なものであったと私は考えている（鶴崎, 1989を参照）。これらの業績により高桑、高島春雄、内田亨の3氏から学位論文をまとめるように促され、1959年暮れに東亜蜘蛛学会臨時出版という形で「日本の倍足類」を自費出版、これにより1960年2月北海道大学より理学博士の学位を授与された。51才のときである。恩師の高桑氏は同年3月9日に88才で亡くなられたが、病床でこの報に接し、万歳と唱えられたという逸話が残っている（高島, 1960; 内田, 1960）。

この後、三好先生は松山北高校を退職された1966年の4月より1984年まで聖カタリナ女子短期大学（愛媛県北条市）の教授を務められた。三好先生は1954年頃より多足類の研究と並行して愛媛県のシダ類や他の高等植物の調査を手がけられていたが、大学に移られて以後は、ほとんど完全に植物へ研究対象を移されてしまった。多足類学界にとっては残念なことであったが、ちょうどその頃より同じ愛媛県内で村上好央氏が、また東京では篠原圭三郎氏が活発な研究を開始されており、安心されたこともあったのであろう。この時期には愛媛県の山野に自生する植物に関する味わい深い連載エッセイを地元の愛媛新聞や「植物と自然」誌などに数多く書かれ、後者は、「木の実・草の実」という本として刊行されている（三好, 1977）。さらに後年は、博物学史に傾倒されていた様子で、私が1987年の8月16日に所用で先生のお宅を訪ねたときには、2冊お持ちという解体新書や江戸時代に宇和島藩から出された博物誌関係の書物についての話を伺った記憶がある（ただし、博物学史に対する造詣の深さは1950年の論文でも伺える）。また山や生物学史に関する古書籍の収集は先生の最大の趣味でもあったようで（三好, 1983, 1985）、このときには庭の蔵を改造された書庫を見せていただいた。

さて、以下には私の三好先生との個人的な接点、そして先生から受けた影響を記しておきたい。松山市に生まれ育った私が三好先生のお名前を初めて耳にしたのは、クモの研究に興味を持ち始めた中学校2年の頃だった。私の母から松山には三好保徳という名前のメクラグモ（この呼称はあまり使いたくないが、当時は一般にザトウムシのことをこのように呼んでいたのであえてここでは使用する）の先生がいるという話を吹き込まれたのである。三好先生は私の母が昭和16年に松山高等女学校（現在松山南高校）に進学したとき生物学を習った先生であり、当時、三好先生は皿ヶ嶺でのザトウムシ研究に邁進されている時期でもあったので、母の耳にも先生の名前がメクラグモ研究と結びついて記憶されていたのだろう。

それまで、私の趣味のクモ研究は全くの独学だったので、一度えらい先生にお会いして直接

話を伺ってみたいという気持ちを抱いていたが、その機会が中学3年（1970年）の夏休みに訪れた。休みに入ってすぐ学校の課外活動として行われた2泊3日の石鎚山～瓶ヶ森縦走において初めて多数のザトウムシを採集することができたので、それらの名前を教えてもらうのを口実に思いきって三好先生のお宅を訪ねることにしたのである。7月30日のことで、友人のT君を道連れにしての訪問だった。住所はクモ学会の名簿で見えており、私の家からは自転車で10分もかからない距離だったので、お宅はすぐに見つけることができた。このとき、今となっては記憶がないが、無遠慮にもいきなり押しかけたような気がする。突然現われた見ず知らずの中学生であるにもかかわらず、先生はいやな顔一つされず、ザトウムシや多足類の研究方法、それに生物学の研究の楽しさや難しさなど、さまざまな話をして下さった。中でもとくに印象に残ったのはかつてメダマザトウムシと呼んでいた眼の巨大な風変わりなザトウムシ（現在のマメザトウムシ）が皿ヶ嶺の風穴の杉林の樹幹にいたが、戦後スギが伐採されてから見かけなくなったという話だった。これを聞いて8月4日には早速マメザトウムシを探しに、T君とともに皿ヶ嶺へ出かけた。このとき、マメザトウムシは見つからなかったものの、キャンプ場のある竜神平とよばれる平坦地のササ群落をかきわけて初対面の数種のザトウムシを見つけることができ、この動物への興味をますます深めることになった。

この頃、三好先生にいただいた葉書にあった言葉でいまでもよく覚えているのは、「ピラミッドと同じで底辺が広ければ広いほどより深みのある研究ができる。いろいろなことに興味をもち勉強することが大切です」というものである。これは、学校の成績の教科間のアンバランスのひどかった当時の私のためにあるような言葉で座右の銘にしていたが、その割に実行が伴わなかったのが悔やまれる。

さて、翌年（1971年）高校に進学して生物部に入った私はザトウムシを研究対象に選び、皿ヶ嶺通いを始めた。入学祝いとして手に入れた復刻版の *Acta Arachnologica* (Vols. 1-9) の中に戦前、三好先生が皿ヶ嶺で行われたザトウムシ類の研究論文が多数含まれており、これを足掛かりとすれば何かの研究調査ができそうだと考えたからである。クモと比べると種数が少ないことも、高校の3年間で成果をまとめるには好都合に思われた。この山歩き（三好先生が戦前にたどられたのとは異なり、久万町の六部堂という登山口から上って頂上と風穴を経て上林へ下りる経路をとることが多かった）をとおして私はさまざまなことを学んだが、山歩きの傍ら花の名前が気にかかるようになったも、この頃である。これは、地元の愛媛新聞の夕刊に三好先生が連載されていた愛媛県の山野の草花についての随筆（「花」というタイトルで、1970年から1971年5月31日まで45回連載）を愛読したことの影響である。この名文で綴られた随筆には三好先生が好んで歩かれたこの皿ヶ嶺や周辺の久万町の山々の地名がよく出ていた。気になっていたマメザトウムシもまもなく見つかり、これはのちに、実にささやかな内容で今では見るのも恥ずかしいが、私が書いた初めての研究報告書となった（鶴崎ら、1974）。なお、この報告書の作成を指導して下さった生物部のF先生はかつて松山北高校勤務の折に三好先生と机を並べており、また現在は私と同じ鳥取大学で教鞭をとっておられることも奇縁といえは奇縁である）。

三好先生宅を2度目に訪問したのは高校3年（1973年）の11月24日で、このときの目的は生

物部の後輩2人が始めることになった松山城跡や松山平野に点在する社叢のヤスデの分布をテーマとした研究にアドバイスを受けることだった。この研究計画案の作成には私も少なからず関与したので、その後輩たちに同伴したのである。このときには「高桑良興先生が松山に疎開されていた頃に松山城の県庁側から上がる登山道の石垣のある付近で採られたというトリデヤスデがその後の再三の採集試みにも関わらず見つからない」ことや、「イシイオビヤスデは椿神社（松山市石井）が模式産地だけれども、その周辺の社叢にも生息するかどうかはまだ調べていない」といったヤスデ類に関する話をいろいろと伺った。また、先生が魚類にはじまってザトウムシ、多足類とテーマを変えられた経緯や、右手の怪我のために負った研究上の苦労などについても語っていただいた。戦時中に右手に火傷を負ったのち、ペンを左に持ち換える練習をされたが、初めの頃は早く字を書こうとするとペン先が逆に回ったりして具合が悪かったという。そのため、図などはしばらくの間は右手で、薬指のつけねの部分とほぼ完全に残った小指とでペンを挟むようにして描かれたらしい。図や字をすべて左手で書かれるようになったのは最近のことで、「日本の倍足類」の図は右手で、「木の実・草の実」の原図は左手で描かれたものだという。後者は「植物と自然」に当時連載されていた随筆であるが、そのすばらしい原図もこのとき見せていただいた。なお、このときのヤスデ班はその後、新居浜の村上好央先生の指導をも受けて順調に成果を挙げていたと聞いたが、それらが公表にまでいったかどうか、私は確認していない（追記参照）。

このような経緯から、私はザトウムシ分類の大家である鈴木正将先生のおられた広島大学理学部を進学先を選び、幸い現在にいたるまでザトウムシ類を研究材料として仕事を続けている。最近はさらにヤスデを材料とした仕事についても若干の関わりをもつようになった。ザトウムシの研究上の同業者であり、ツムギヤスデ類の系統分類の第一人者でもある米国のWilliam A. SHEAR 博士からの働きかけがきっかけで、日本産のツムギヤスデ類の分類に関する共同研究にも参加することになったのである（SHEAR et al., 1994参照）。振り返れば、私の進路は実にいろいろなところで三好先生の存在に導かれてきたように思える。さらに、今年、三好先生が亡くなられたのとちょうど同日、我が家に長男が誕生した。そのせいで私は先生の葬儀には参列できなかったのであるが、三好先生が生まれ変わられたかのような不思議な気持ちがあったものである。

三好先生はその分類研究の基礎の大半を高等学校での多忙な勤務のかたわらに独学で学ばれた。また多足類の研究に要求される生殖肢や歩肢の解剖という細かい作業をハンディキャップのある右手を駆使してやり遂げられた。今日のようにコピー機のない時代に地方において欧文の多数の文献を収集することの苦労も多大なものがあつたであろう。現在、私は文献の中身が一字一字丹念に筆写された三好先生のノートや手帳を多数手元に預かっているが、ある種の感動なしにそれらを眺めることはできない。幸い、三好先生は多足類研究の初期においては高桑博士が託された多数の文献が利用できたわけであるが、それをさらに充実させるためにあらゆる努力を払われていたようである。三好先生が残された文献に挟まれていた欧米の古書店の納品書の日付には1970年代以降のものも多く、三好先生ご自身が多足類の研究から実質的に離れてからも文献収集自体はずっと後まで続けられていたことがわかる。文献収集に対する

執念が感じられる。

このように、三好先生がその研究の遂行に対して払われた努力のすさまじさは、それを知る者に感銘を与えないではおかぬ。それを知る多くの人々が口をそろえて篤学の士と賛え、三好先生の業績の紹介をされている（高島, 1960; 内田, 1960; 村上, 1972）のも大いにうなずけることである。三好先生は明治時代の愛媛県のある生物学者の紹介記事（三好, 1972）の中で「当時の人々の研究への執念というものは物すごいものであったことがひしひしと感じられ、私たちを奮起させずにはおかぬのである」と書いておられるが、三好先生の足跡を振り返る度に私にも同様の奮起の情が沸き上がる。ご自身で研究・教育の軌跡を振り返って書かれた随筆（三好, 1983）も、生物教育に携わる多くの人に広く読んでいただきたい内容を含んでいる。教育・研究をめぐる環境が今日では大きく変わっているとはいえ、時代を超えて通じる大切な心構えがそこには記されているように思う。

すでに別のところで報告済みであるが、高桑良興博士から引き継ぎ、さらに氏自身が主にヨーロッパの古書店などを通じて丹念に追加収集された上述の多足類文献約1200編は、三好先生ご自身とご家族、とくに奥様の千枝子様と御自宅を継いでおられるご三男の莞爾様のご厚意により北海道大学に寄贈され公開利用の道が開けていることを付記しておく。

#### 謝辞

三好先生に関わる文献の一部は湊宏博士のご厚意で入手できたものである。また、今回の三好博士追悼号の編集にあたっては萩野康則氏に多大な尽力をいただいた。とくに記して御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 三好保徳, 1936. ドブネズミ, 及びジブトネズミの咬筋に就いて. 台湾博物学会会報, **26** (159): 440-445.
- 三好保徳, 1949. 高桑先生の喜寿を祝う. *Acta arachnol.*, **11** (1/2): 1-4.
- 三好保徳, 1950. 蘭学が起った頃を想う. 伊予史談, (126): 43-50.
- 三好保徳, 1962. 高島春雄先生を悼む. *Atypus*, (26/27): 9-11.
- 三好保徳, 1972. 愛媛の生物教育につくした人々. 愛媛の生物, pp. 3-10. 愛媛県高等学校教育研究会理科部会.
- 三好保徳, 1977. 木の実・草の実. 160pp. ニュー・サイエンス社, 東京.
- 三好保徳, 1983. 私は50年以上生物の教師をしています. 愛媛高校理科創立20周年記念特集号, pp. 1-4.
- 三好保徳, 1985. リレー連載わたしの蔵書 (1)「種の起原」翻訳本を中心として. 四不像, (15): 14-15.
- 村上好央, 1972. 愛媛の多足類. 愛媛の生物, pp. 83-88. 愛媛県高等学校教育研究会理科部会.
- ROEWER, C. F., 1923. *Die Weberknechte der Erde*. Gustav Fischer, Jena, 1116pp.
- SHEAR, W. A., N. TSURUSAKI & T. TANABE, 1994. Japanese Chordeumatid millipeds.



I. On the genus *Speophilosoma* TAKAKUWA (Diplopoda, Chordeumatida, Speophilosomatidae). *Myriapodologica*, **3**(4):25-36.

高島春雄, 1960. この師この弟子. *Atypus*, (19):23.

鶴崎展巨, 1989. 卵を守る父親. 梅谷献二・加藤輝代子 (編), クモのはなし II, pp. 33-41. 技法堂出版, 東京.

鶴崎展巨・八重島由季雄・山下秀樹・和気現人・八木孝一, 1974. メクラグモ類の生態. —マメザトウムシの2新産地—. 遺伝, **28** (2):43-46.

内田亨, 1960. 嫌われる蟲の研究者. 学燈, **57** (11):35-37.

#### 【追記】

本稿脱稿後, 松山東高校生物部ヤスデ班の成果は次の報告書として公表されていることがわかった. ご教示いただいた藤島弘純教授 (鳥取大学教育学部) に御礼申し上げます.

森清重・越智幹夫・森康司・松友貴文・西尾信明・大川恵三・上河原献二・大井田正人・金沢慶治・町田匡史・藤島弘純, 1980. 松山城山のヤスデ類の生態学的調査. 動物と自然, **10** (9):30-34.